

1.6 高次導関数と Taylor の定理

関数 $y = f(x)$ の導関数 $y' = f'(x)$ が微分可能なとき更にその導関数を考えることが出来る。 $y = f(x)$ の導関数の導関数を 2 次導関数または 2 階の導関数といい

$$\frac{d^2 f}{dx^2}(x), \quad \frac{d^2 y}{dx^2}, \quad f''(x), \quad y''$$

などと表す。 $y = f(x)$ の導関数の導関数の導関数を 3 次導関数または 3 階の導関数といい

$$\frac{d^3 f}{dx^3}(x), \quad \frac{d^3 y}{dx^3}, \quad f'''(x), \quad y'''$$

などと表す。 n を 0 以上の整数とする。 $f(x)$ を n 回微分して得られる関数を n 次の導関数または n 階の導関数といい

$$\frac{d^n f}{dx^n}(x), \quad \frac{d^n y}{dx^n}, \quad f^{(n)}(x), \quad y^{(n)}$$

などと表す。 $f^{(0)}(x)$ は $f(x)$ を 0 回微分したもの, 即ち一回も微分しない 0 次導関数なので, $f^{(0)}(x) = f(x)$ を意味する。2 階以上の導関数を高次導関数と呼ぶ。以下この節では関数は必要な回数だけ微分可能であることを仮定する。

関数の和の高次導関数を考える。 $F(x) = f(x) + g(x)$ とすると

$$F'(x) = f'(x) + g'(x)$$

であり, もう一度微分すると

$$F''(x) = f''(x) + g''(x)$$

となる。何回微分しても同様なので

$$(f(x) + g(x))^{(n)} = f^{(n)}(x) + g^{(n)}(x)$$

となる。

次に関数の積の高次導関数を考える。 $F(x) = f(x)g(x)$ のとき積の微分法より

$$F'(x) = f'(x)g(x) + f(x)g'(x)$$

である。もう一度微分すると

$$\begin{aligned} F''(x) &= f''(x)g(x) + f'(x)g'(x) + f'(x)g'(x) + f(x)g''(x) \\ &= f''(x)g(x) + 2f'(x)g'(x) + f(x)g''(x) \end{aligned}$$

となる。一般に次が成立する。

命題 1.23 [ライプニッツの定理]

$$(f(x) \cdot g(x))^{(n)} = \sum_{k=0}^n \binom{n}{k} f^{(n-k)}(x) g^{(k)}(x)$$

ここで $\binom{n}{k}$ は 2 項係数で $\binom{n}{k} = \frac{n!}{k!(n-k)!}$ である。

演習問題 1.19 ライプニッツの定理を数学的帰納法で証明せよ。

2 項係数に関して

$$\binom{n}{k-1} + \binom{n}{k} = \binom{n+1}{k}$$

が成立することは既知としてよい。

例 1.24 (1) $f(x) = xe^x$ の n 次導関数を求める。 $g(x) = x, h(x) = e^x$ とおくと, $g'(x) = 1, g''(x) = 0, g^{(n)}(x) = 0 (n \geq 2)$ であり, $h^{(n)}(x) = e^x (n \geq 0)$ なのでライプニッツの定理より

$$\begin{aligned} f^{(n)}(x) &= \sum_{k=0}^n \binom{n}{k} h^{(n-k)}(x) g^{(k)}(x) \\ &= \sum_{k=0}^1 \binom{n}{k} h^{(n-k)}(x) g^{(k)}(x) = xe^x + ne^x \end{aligned}$$

となる。

(2) $f(x) = \frac{1}{x}$ とする。 $f'(x) = -\frac{1}{x^2}, f''(x) = \frac{2}{x^3}, f'''(x) = -\frac{6}{x^4} = -\frac{3!}{x^4}$ なので

$$f^{(n)}(x) = (-1)^n \frac{n!}{x^{n+1}}$$

と予想できる。これを数学的帰納法で証明する。

$n = 1$ のときは

$$f'(x) = -\frac{1}{x^2} = (-1)^1 \frac{1!}{x^{1+1}}$$

なので成立している。 $n = k$ のとき成立を仮定する。即ち $f^{(k)}(x) = (-1)^k \frac{k!}{x^{k+1}}$ を仮定する。両辺を x で微分すると

$$\begin{aligned} f^{(k+1)}(x) &= (f^{(k)}(x))' = \left((-1)^k \frac{k!}{x^{k+1}} \right)' \\ &= (-1)^k (-k-1) \frac{k!}{x^{k+2}} = (-1)^{k+1} \frac{(k+1)!}{x^{(k+1)+1}} \end{aligned}$$

なので $k+1$ のときも成立する。

演習問題 1.20 次の関数の n 次導関数を求めよ。(問題では「数学的帰納法で示す」ことを要求されていないので、数学的帰納法で証明しなくてもよいが、それを要求されたときはできるようにしておくこと。)

- (1) $f(x) = x^3 e^x$ (2) $f(x) = x^3 \log x$
 (3) $f(x) = \frac{1}{x+1}$ (4) $f(x) = \log(x+1)$
 (5) $f(x) = \frac{1}{x^2-x}$ (6) $f(x) = \sin x$
 (7) $f(x) = \sin x \cos x$ (8) $f(x) = x^4$

次の定理は「Taylor の定理」と呼ばれ色々な応用がある。

定理 1.25 [Taylor(テラー)の定理]

$$f(x) = \sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(a)}{k!} (x-a)^k + \frac{f^{(n)}(a + \theta(x-a))}{n!} (x-a)^n$$

$$= f(a) + f'(a)(x-a) + \cdots + \frac{f^{(n-1)}(a)}{(n-1)!} (x-a)^{n-1} + \frac{f^{(n)}(a + \theta(x-a))}{n!} (x-a)^n$$

を満たす θ ($0 < \theta < 1$) が存在する。 $R_n = \frac{f^{(n)}(a + \theta(x-a))}{n!} (x-a)^n$ を剰余項と呼ぶ。

証明 天下りではあるが、 $R = f(x) - \left(\sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(a)}{k!} (x-a)^k \right)$ と置き、

$$F(t) = f(x) - \left(\sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(t)}{k!} (x-t)^k \right) - \frac{R}{(x-a)^n} (x-t)^n$$

と置く。

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} \left(\sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(t)}{k!} (x-t)^k \right) &= \frac{d}{dt} \left(f(t) + \sum_{k=1}^{n-1} \frac{f^{(k)}(t)}{k!} (x-t)^k \right) \\ &= f'(t) + \sum_{k=1}^{n-1} \left(\frac{f^{(k+1)}(t)}{k!} (x-t)^k - \frac{f^{(k)}(t)}{k!} k(x-t)^{k-1} \right) \\ &= \sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k+1)}(t)}{k!} (x-t)^k - \sum_{k=1}^{n-1} \frac{f^{(k)}(t)}{k!} k(x-t)^{k-1} \\ &= \sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k+1)}(t)}{k!} (x-t)^k - \sum_{k=1}^{n-1} \frac{f^{(k)}(t)}{(k-1)!} (x-t)^{k-1} \\ &= \sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k+1)}(t)}{k!} (x-t)^k - \sum_{k=0}^{n-2} \frac{f^{(k+1)}(t)}{k!} (x-t)^k \\ &= \frac{f^{(n)}(t)}{(n-1)!} (x-t)^{n-1} \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned}\frac{dF(t)}{dt} &= -\frac{d}{dt} \left(\sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(t)}{k!} (x-t)^k \right) + \frac{R}{(x-a)^n} n(x-t)^{n-1} \\ &= -\frac{f^{(n)}(t)}{(n-1)!} (x-t)^{n-1} + \frac{R}{(x-a)^n} n(x-t)^{n-1} \\ &= \left(\frac{R}{(x-a)^n} - \frac{f^{(n)}(t)}{n!} \right) n(x-t)^{n-1}\end{aligned}$$

このとき,

$$\begin{aligned}F(a) &= f(x) - \left(\sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(a)}{k!} (x-a)^k \right) - \frac{R}{(x-a)^n} (x-a)^n \\ &= f(x) - \left(\sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(a)}{k!} (x-a)^k \right) - R \\ &= R - R = 0 \\ F(x) &= f(x) - \left(\sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(x)}{k!} (x-x)^k \right) - \frac{R}{(x-a)^n} (x-x)^n \\ &= f(x) - f(x) = 0\end{aligned}$$

が成立するのでロルの定理より $\frac{dF(c)}{dt} = 0$ ($a < c < x$ または $x < c < a$)

となる c が存在する。このとき $\frac{R}{(x-a)^n} - \frac{f^{(n)}(c)}{n!} = 0$ が成立する。

$\theta = \frac{c-a}{x-a}$ と置くと定理が得られる。■

剰余項 R_n には θ を用いる表現と c を用いる表現があり, c の方が表記が簡単であるが, 範囲の条件に場合分けが必要になる。 θ を用いると $R_n = \frac{f^{(n)}(a + \theta(x-a))}{n!} (x-a)^n$, c を用いると $R_n = \frac{f^{(n)}(c)}{n!} (x-a)^n$ と書ける。

範囲の条件は θ の場合は $0 < \theta < 1$, c の場合は, $a < x$ のとき $a < c < x$, $x < a$ のとき $x < c < a$ となる。

演習問題 1.21 $a \neq x$ のとき $c = a + \theta(x-a)$ とする。次を示せ。

$$0 < \theta < 1 \iff \begin{cases} a < c < x & (a < x \text{ のとき}) \\ x < c < a & (x < a \text{ のとき}) \end{cases}$$

定理 1.25 は次の形でも述べることができる。

系 1.26 任意の h に対し, ある θ ($0 < \theta < 1$) が存在して

$$f(a+h) = \sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(a)}{k!} h^k + \frac{f^{(n)}(a+\theta h)}{n!} h^n$$

と表せる。

Taylor の定理について 3 つの応用を扱う。最初の応用として極値に関する次の定理を考える。

定理 1.27 $f'(a) = \dots = f^{(n-1)}(a) = 0$, $f^{(n)}(a) \neq 0$ とする。

(1) n が偶数のとき $f(x)$ は $x = a$ で極値をとる。

1) $f^{(n)}(a) > 0$ のとき $f(a)$ は極小である。

2) $f^{(n)}(a) < 0$ のとき $f(a)$ は極大である。

(2) n が奇数のとき $f(x)$ は $x = a$ で極値をとらない。

1) $f^{(n)}(a) > 0$ のとき $f(x)$ は $x = a$ で増加の状態にある。

2) $f^{(n)}(a) < 0$ のとき $f(x)$ は $x = a$ で減少の状態にある。

証明 (1), (2) とも 1) の場合のみ示す。 $f^{(n)}$ が連続かつ $f^{(n)}(a) > 0$ なので a を含むある区間 $(a-\delta, a+\delta)$ において $f^{(n)}(x) > 0$ となる。この区間内の x についてテーラーの定理を適用すると $f'(a) = \dots = f^{(n-1)}(a) = 0$ なので $f(x) = f(a) + \frac{f^{(n)}(c)}{n!}(x-a)^n$ となる。

(1) n が偶数の場合 $x \neq a$ ならば $(x-a)^n > 0$ なので, $f(x) - f(a) > 0$ 即ち $f(x) > f(a)$ となる。よって f は $x = a$ で極小である。

(2) n が奇数の場合 $x - a > 0$ ならば $(x-a)^n > 0$, $x - a < 0$ ならば $(x-a)^n < 0$ である。よって $x > a$ ならば $f(x) > f(a)$, $x < a$ ならば $f(x) < f(a)$ となっている。■

演習問題 1.22 定理 1.27 の (1), (2) の 2) の場合を証明せよ。

具体例を知っていると定理 1.27 の理解が容易になるかもしれない。 $y = f(x) = x^2$ とする。 $x = 0$ で $y = f(x)$ は最小値なので, 極小である。 $f'(0) = 0$, $f''(0) \neq 0$ なので定理の $n = 2$ (偶数) の場合で実際極値になっている。

次に $y = f(x) = x^3$ とする。 $f'(0) = f''(0) = 0$, $f'''(0) \neq 0$ なので定理の $n = 3$ (奇数) の場合で実際極値ではない。実際に $y = f(x) = x^3$ は $x = 0$ で極値をとらないことが知られている。

Taylor の定理の 2 番目の応用として近似がある。3 次までの近似はすでに扱っているが, Taylor の定理を用いると何次まででも考えることが

できることに加えて、「誤差の評価がきちんとできる」という利点がある。
 $n = 2$ の場合を考えてみよう。 $n = 2$ の場合

$$f(x) = f(a) + f'(a)(x - a) + \frac{f''(c)}{2!}(x - a)^2$$

となるが、 $f''(x)$ は有界なので、 $x - a$ が非常に小さいとき、最後の項は (非常に)² 小さい。よってこの項を切り捨てる。これは線型近似を与えた。

真の値 $f(x)$ と近似値 $f(a) + f'(a)(x - a)$ の差を誤差と言うが、誤差の絶対値が最大どれ位になるかを評価しよう。誤差を Δ とすると

$$\Delta = f(x) - (f(a) + f'(a)(x - a)) = \frac{f''(c)}{2}(x - a)^2$$

となるので $|f''(x)|$ の最大値を

$$M = \max \{ |f''(x)| \mid x \in I \} \quad (I = [a, x] \text{ または } [x, a])$$

とすると

$$|\Delta| \leq \frac{M}{2} |x - a|^2$$

が分かる。

例を考える。 $f(x) = \sin x$, $x = \frac{5\pi}{16}$, $a = \frac{\pi}{4}$ とする。 $n = 2$ として Taylor の定理を用い剰余項を切り捨てると近似値は

$$\sin\left(\frac{5\pi}{16}\right) \doteq \sin\left(\frac{\pi}{4}\right) + \cos\left(\frac{\pi}{4}\right)\left(\frac{5\pi}{16} - \frac{\pi}{4}\right) = \frac{1}{\sqrt{2}} + \frac{1}{\sqrt{2}} \frac{\pi}{16}$$

である。 $f''(x) = -\sin x$ より $M = \max \{ |f''(x)| \mid x \in I \} = 1$ なので誤差の最大値は

$$|\Delta| = \left| \frac{f''(x)}{2}(x - a)^2 \right| \leq \left| \frac{1}{2} \left(\frac{\pi}{16}\right)^2 \right| < \frac{1}{2} \left(\frac{4}{16}\right)^2 = \frac{1}{32}$$

であることが分かる。

次に $n = 3$ の場合を考える。

$$f(x) = f(a) + f'(a)(x - a) + \frac{f''(a)}{2!}(x - a)^2 + \frac{f'''(c)}{3!}(x - a)^3$$

$x - a$ が非常に小さいとき最後の項は (非常に)³ 小さい。この項を切り捨て $f(x)$ を

$$f(a) + f'(a)(x - a) + \frac{f''(a)}{2!}(x - a)^2$$

で近似する。これは線型近似より一般的にはよりよい近似になっている。

前に考えた $f(x) = \sin x$, $x = \frac{5\pi}{16}$, $a = \frac{\pi}{4}$ で $n = 3$ の場合を考える。
 近似値および誤差の最大値は

$$\begin{aligned} \sin\left(\frac{5\pi}{16}\right) &\doteq f(a) + f'(a)(x-a) + \frac{f''(a)}{2}(x-a)^2 \\ &= \sin\left(\frac{\pi}{4}\right) + \cos\left(\frac{\pi}{4}\right)\left(\frac{5\pi}{16} - \frac{\pi}{4}\right) - \frac{1}{2}\sin\left(\frac{\pi}{4}\right)\left(\frac{5\pi}{16} - \frac{\pi}{4}\right)^2 \\ &= \frac{1}{\sqrt{2}} + \frac{1}{\sqrt{2}}\frac{\pi}{16} - \frac{1}{2\sqrt{2}}\left(\frac{\pi}{16}\right)^2 \\ |\Delta| &= \left|\frac{f'''(c)}{3!}(x-a)^3\right| \leq \frac{1}{6}\left(\frac{\pi}{16}\right)^3 < \frac{1}{6}\left(\frac{4}{16}\right)^3 = \frac{1}{384} \end{aligned}$$

となる。

関数 $f(x) = f(a+h)$ を h に関する n 次式 $g(h)$ で近似することを考える。 $d(h) = f(a+h) - g(h)$, $\varepsilon(h) = \frac{d(h)}{h^n}$ とおく。 $\lim_{h \rightarrow 0} \varepsilon(h) = 0$ が成立するとき $g(h)$ のことを $f(a+h)$ を $x = a$ で近似する n 次式という。

命題 1.28 $f(x)$ に対し h に関する n 次式

$$g(h) = \sum_{k=0}^n \frac{f^{(k)}(a)}{k!} h^k$$

は $f(a+h)$ を $x = a$ で近似する n 次式である。

証明 テーラーの定理において n を $n+1$ にして適用する。 $d(h) = f(a+h) - g(h) = \frac{f^{(n+1)}(a+\theta h)}{(n+1)!} h^{n+1}$ なので $\varepsilon(h) = \frac{f^{(n+1)}(a+\theta h)}{(n+1)!} h$ となる。

$M = \max\{|f^{(n+1)}(a+\theta h)| \mid 0 \leq \theta \leq 1\}$ とおくと $|\varepsilon(h)| \leq \frac{M}{(n+1)!} |h|$ が成立する。よって $\lim_{h \rightarrow 0} \varepsilon(h) = 0$ が成立する ■

自然対数の底 e の近似計算をこの方法により考える。 $f(x) = e^x$, $a = 0$, $x = 0 + h$ とする。 $f'(x) = e^x$ より, 任意の n に対し $f^{(n)}(x) = e^x$ となる。剰余項 R_{n+1} を切り捨てた近似式を $g_n(x)$ とすると

$$g_n(h) = 1 + h + \frac{1}{2!} h^2 + \cdots + \frac{1}{n!} h^n$$

となる。 $a_n = g_n(1)$ が e の近似値を与える。 $n = 10$ とすると

$$\begin{aligned} a_{10} &= 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \frac{1}{4!} + \frac{1}{5!} + \frac{1}{6!} + \frac{1}{7!} + \frac{1}{8!} + \frac{1}{9!} + \frac{1}{10!} \\ &= 2.718281801 \end{aligned}$$

となる。 a_{10} の誤差 Δ はテーラーの定理で $n = 11$ としたときの剰余項なので

$$|\Delta| = \left| \frac{f^{(11)}(c)}{11!} (1-0)^{11} \right| = \frac{e^c}{11!} \leq \frac{e}{11!} < \frac{3}{11!} \\ = 7.515632515632516 \times 10^{-8}$$

今行った計算は n を決めて誤差を求めた。次に誤差をある程度以下になるように n を決定することを考える。

e の近似値を 10^{-10} 以下の誤差になるように求めたいとする。剰余項 R_n が誤差になるので

$$|\Delta| = |R_n| = \frac{e^c}{n!} \leq \frac{e}{n!} < \frac{3}{n!} < 10^{-10}$$

を満たす n を, 即ち $n! > 3 \times 10^{10}$ を満たす n を求めればよい。これを満たす最小の n は

$$14! = 87178291200 > 8.7 \times 10^{10} > 3 \times 10^{10}$$

より 14 である。よって

$$a_{13} = 2.718281828446759$$

が求めるものになる。

演習問題 1.23 $f(x) = e^x$ を $a = 0, n = 6$ としてテーラーの定理を用いて表し, その剰余項 R_6 を切り捨てることにより $\frac{1}{\sqrt{e}}$ の近似値を求めよ。また誤差を評価せよ。

更に同様な方法で誤差が 10^{-10} 以下になるように n を決め近似値を求めよ。計算実行には電卓等を用いてよい⁽¹⁾。

演習問題 1.24 $f(x) = \cos x$ を $a = 0, n = 6$ としてテーラーの定理を用いて表し, その剰余項 R_6 を切り捨てることにより $\cos \frac{\pi}{10}$ の近似値を求めよ。また誤差を評価せよ。

更に同様な方法で誤差が 10^{-10} 以下になるように n を決め近似値を求めよ。計算実行には電卓等を用いてよい。

演習問題 1.25 $f(x) = \log x$ を $a = 1, n = 6$ としてテーラーの定理を用いて表し, その剰余項 R_6 を切り捨てることにより $\log \frac{3}{2}$ の近似値を求めよ。また誤差を評価せよ。

⁽¹⁾厳密には電卓の計算誤差も考慮する必要がある。10桁程度なので電卓等の誤差は無視することにする

更に同様な方法で誤差が 10^{-4} 以下になるように n を決め近似値を求めよ。計算実行には電卓等を用いてよい。

3 番目の応用として Taylor 級数展開がある。関数が何回でも微分可能であり、テーラーの定理の剰余項 $R_n = \frac{f^{(n)}(c)}{n!}(x-a)^n$ が $\lim_{n \rightarrow \infty} R_n = 0$ となるとき、関数は

$$f(x) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{f^{(k)}(a)}{k!} (x-a)^k$$

と表すことができる。これを $x = a$ でのテーラー級数と言い、このとき $f(x)$ は $x = a$ でテーラー(級数)展開可能であるという。これから考える $f(x)$ がテーラー展開可能であることは仮定しておく。

$f(x) = e^x, a = 0$ とする。 $f^{(n)}(0) = e^0 = 1$ なのでテーラー級数は

$$e^x = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} x^k = 1 + x + \frac{1}{2!} x^2 + \frac{1}{3!} x^3 + \cdots + \frac{1}{n!} x^n + \cdots$$

となる。

$f(x) = \sin x$ のときは、 $f'(x) = \cos x, f''(x) = -\sin x, f'''(x) = -\cos x, f^{(4)}(x) = \sin x \dots$ より、 $f^{(2n-1)}(x) = (-1)^{n-1} \cos x, f^{(2n)}(x) = (-1)^n \sin x$ なので $f^{(2n-1)}(0) = (-1)^{n-1}, f^{(2n)}(0) = 0$ である。テーラー級数は

$$\begin{aligned} \sin x &= \sum_{k=1}^{\infty} (-1)^{k-1} \frac{1}{(2k-1)!} x^{2k-1} \\ &= x - \frac{1}{3!} x^3 + \frac{1}{5!} x^5 + \cdots + (-1)^{n-1} \frac{1}{(2n-1)!} x^{2n-1} + \cdots \end{aligned}$$

となる。

$f(x) = \cos x$ のとき $f^{(2n-1)}(x) = (-1)^n \sin x, f^{(2n)}(x) = (-1)^n \cos x$ より $f^{(2n-1)}(0) = 0, f^{(2n)}(0) = (-1)^n$ である。 $\cos x$ のテーラー級数は

$$\begin{aligned} \cos x &= \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \frac{1}{(2k)!} x^{2k} \\ &= 1 - \frac{1}{2!} x^2 + \frac{1}{4!} x^4 + \cdots + (-1)^n \frac{1}{(2n)!} x^{2n} + \cdots \end{aligned}$$

となる。

演習問題 1.26 次の関数の $x = 0$ におけるテーラー級数を求めよ (テーラー展開可能であることは仮定してよい)。(1)–(5) のテーラー級数は $-1 <$

$x < 1$ の範囲で, (8) のテーラー級数は $-\frac{3}{2} < x < \frac{3}{2}$ の範囲で考える。
 なお一般の実数 α と自然数 n に対し

$$\binom{\alpha}{n} = \frac{\alpha(\alpha-1)\cdots(\alpha-n+1)}{n!} \quad (n \geq 1), \quad \binom{\alpha}{0} = 1$$

と定義する。これは α が自然数の場合の 2 項係数の拡張になっている。

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| (1) $f(x) = \log(1+x)$ | (2) $f(x) = \frac{1}{1-x}$ |
| (3) $f(x) = \sqrt{1+x}$ | (4) $f(x) = \frac{1}{1+x}$ |
| (5) $f(x) = \frac{1}{1+x^2}$ | (6) $f(x) = e^{2x}$ |
| (7) $f(x) = \sin 3x$ | (8) $f(x) = \log(2x+3)$ |

演習問題 1.27 次の関数を $x = a$ でテーラー (級数) 展開せよ (テーラー展開可能であることは仮定してよい)。(3), (8) の級数は $0 < x < 2$ の範囲で, (9) の級数は $0 < x < 4$ の範囲で考える。

- | | |
|---|--|
| (1) $f(x) = e^x \quad (a = 1)$ | (2) $f(x) = \sin x \quad (a = \pi)$ |
| (3) $f(x) = \log x \quad (a = 1)$ | (4) $f(x) = e^{3x} \quad (a = 2)$ |
| (5) $f(x) = x^5 \quad (a = 1)$ | (6) $f(x) = \sin x \quad \left(a = \frac{\pi}{2}\right)$ |
| (7) $f(x) = \cos 2x \quad \left(a = \frac{\pi}{2}\right)$ | (8) $f(x) = x^2 \log x \quad (a = 1)$ |
| (9) $f(x) = x^3 \log x \quad (a = 2)$ | |

演習問題で x の範囲を限定してある問題があったが, これについて簡単に説明しておく。

関数 $y = f(x)$ を $x = a$ のまわりでテーラー展開して

$$f(x) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{f^{(k)}(a)}{k!} (x-a)^k$$

としたとき, ($x = a$ のまわりでテーラー展開可能は仮定している) x が a の近くにあるときは級数の収束は保証されているが, a から離れると収束しない場合もある。例えば級数

$$\frac{1}{1-x} = 1 + x + x^2 + x^3 + \cdots + x^n + \cdots$$

を考える。今の場合 0 の近くでは収束するが (実際 $|x| < 1$ なら収束), $|x| > 1$ のときは収束しない。

一般のテーラー級数に関しては, すべての実数で収束するかまたは, ある正の実数 R が存在して $|x-a| < R$ で収束し, $|x-a| > R$ で収束しないことが知られている。このような R を級数の収束半径と呼ぶ。すべて

の実数で収束する場合収束半径を $R = \infty$ と考えると、テーラー級数に対し収束半径が定義される。

e^x の級数展開の x に形式的に ix (i は虚数単位即ち $\sqrt{-1}$) を代入することにより、オイラーは次のオイラーの公式を導いた。

$$\begin{aligned} e^{ix} &= \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} (ix)^k = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{(2k)!} (ix)^{2k} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{(2k+1)!} (ix)^{2k+1} \\ &= \sum_{k=0}^{\infty} \frac{i^{2k}}{(2k)!} x^{2k} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{i \cdot i^{2k}}{(2k+1)!} x^{2k+1} \\ &= \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \frac{1}{(2k)!} x^{2k} + i \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \frac{1}{(2k+1)!} x^{2k+1} \\ &= \cos x + i \sin x \end{aligned}$$

オイラーの公式と指数法則を知っていれば 3 角関数の加法定理は自然に出て来る。オイラーの公式より $e^{ix} = \cos x + i \sin x$, $e^{iy} = \cos y + i \sin y$, $e^{i(x+y)} = \cos(x+y) + i \sin(x+y)$ を得る。 $e^{i(x+y)} = e^{ix} e^{iy}$ なので,

$$\begin{aligned} \cos(x+y) + i \sin(x+y) &= (\cos x + i \sin x)(\cos y + i \sin y) \\ &= (\cos x \cos y - \sin x \sin y) + i(\sin x \cos y + \cos x \sin y) \end{aligned}$$

この式の実部同士、虚部同士を比較すると加法定理が得られる。

演習問題 *1.28 次を示せ。 $1 \leq p \leq n$ を満たす実数 p に対し

$$f(x) = \sum_{k=0}^{n-1} \frac{f^{(k)}(a)}{k!} (x-a)^k + \frac{(1-\theta)^{n-p} f^{(n)}(a + \theta(x-a))}{p(n-1)!} (x-a)^n$$

を満たす θ ($0 < \theta < 1$) が存在する。

$$R_n = \frac{(1-\theta)^{n-p} f^{(n)}(a + \theta(x-a))}{p(n-1)!} (x-a)^n$$

をロシュの剰余項と呼ぶ。 $p = n$ とすると定理 1.25 の剰余項になる。これをラグランジェの剰余項という。 $p = 1$ としたものをコーシーの剰余項と呼ぶ。

演習問題 *1.29 次の関数がテーラー級数展開可能であること、即ち剰余項 R_n に対し $\lim_{n \rightarrow \infty} R_n = 0$ が成立することを示せ。最初の 3 つの式は任意の x について成立するが、最後の 2 つには制限がつく。

$$e^x = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} x^k$$

$$\sin x = \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \frac{1}{(2k+1)!} x^{2k+1}$$

$$\cos x = \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \frac{1}{(2k)!} x^{2k}$$

$$\log(1+x) = \sum_{k=1}^{\infty} (-1)^{k-1} \frac{1}{k} x^k \quad (-1 < x < 1)$$

$$(1+x)^\alpha = \sum_{k=0}^{\infty} \binom{\alpha}{k} x^k \quad (-1 < x < 1)$$

演習問題 *1.30 次の関数は何回でも微分可能であるが, $x=0$ でテーラー級数展開可能でないことを次にしたがって示せ。

$$f(x) = \begin{cases} e^{-\frac{1}{x}} & (x > 0) \\ 0 & (x \leq 0) \end{cases}$$

- (1) $g(t)$ を n 次の多項式とするととき $\lim_{t \rightarrow \infty} \frac{g(t)}{e^t} = 0$ が成立することを n に関する数学的帰納法で示せ ($n=0$ から始めること)。
 (2) $f^{(n)}(x)$ はある多項式 $P_n(t)$ を用いて

$$f^{(n)}(x) = \begin{cases} P_n\left(\frac{1}{x}\right) e^{-\frac{1}{x}} & (x > 0) \\ 0 & (x \leq 0) \end{cases}$$

と表されることを n に関する数学的帰納法で示せ ($n=0$ から始めること)。

- (3) $f(x)$ が $x=0$ でテーラー級数展開可能だと仮定すると矛盾することを示せ。